こどもの國

創刊號

¥.450

昭和二十一年十一月八日印刷納本
昭和二十一年十一月十二日發行

發行所　香川兒童文化研究會　丸亀市地方一九三

編輯兼發行人　瀧口春男

印刷人　丸亀市地方一六八　今井清太郎

印刷所　丸亀市地方一六一　丸亀製版印刷所

目次

足跡に咲いた花　久留島武彦……二
草ものがたり　中西壽六……九
樂聖シューベルト　黄金の蜘蛛　新田左武郎……十三
さぬきの思ひ出　石森延男……十九
詩　子供らに　田中克己……一
短歌　硯滴　前川佐美雄……二五
兒童童話　ニャンチャンの失敗……二七
應募短歌・俳句・俳句鑑賞　新田冬果……三二
三行詩……三七
作品　兒童作文……四〇

お腹がすいてくると、ごはんをいただくと同じように、心のひもじいときには、心のごはんをいただかねばなりません。お口からいただくごはんは、お腹にたまつて、あなた方を太らせ大きくさせてくれます。目や耳からいただく心のごはんは、頭にたまつて、あなた方のタマシイを、ゆたかに、そだてくれます。心のひもじいときとは、どんなときでせう。目や耳でいただく心のごはんとは、何んでせう。「こどもの國」は、心のごはんのおぜんなのです。どんなごちさうが、このおぜんに、のつかつてゐるでせう。よく目をひらき、耳をすませて、しづかに、心の箸をおとり下さい。

表紙　丸亀城西校　初二　末松澄子

子供らに

田中克己

ながいあいだお父さんはお前たちを見なかつた
同じ年ごろの子供たちを見るとお前たちを思つた
食べものの少い内地でどうしてゐるだらうか
空襲で家を焼かれて泣いてゐはしないかと
歸つて來ると集團疎開をしてゐた太郎は
掃除や草取りやふな釣りをおぼえて來たし
女の子たちもけんくわしないで留守番してゐたと
お母さんの話をきいてお父さんは安心した

お父さんたちはながいあひだ戰爭ばかりにせい出して
お米を作ることも鹽作ることもしなかつた
これからはどん〳〵作つてお前たちに食べささう
お父さんたちの失敗をくはしく話して聞かさう
二度とそんな失敗をせず世界中の人から
好かれる國民になるやうにくはしく話してあげやう
さあ太郎も花子ももつとそばへお寄りなさい
夜は長いし話すことはたくさんあるのだ。

足跡に咲いた花

武島羽衣　久留島

昔の諺に、よい人の歩いた足跡には花が咲き、悪い人の寢たあとには、草も生へないといふ言葉があります。

こゝに眞實に、足跡に咲た花として、北米合衆國のカリホルニヤに、亞米利加印度人の傳説として、美しい花物語があります。

それは昔の昔の事、まだカリホルニヤに白人の入つて來ない前、そこに棲で居つたインデアンの部落に、アマポラと云ふ賢こい子供がありました。

一日、部落の近くの河原で、ひとり砂を堀つて、お池遊びを遊んで居る時、砂の中にピカリと光つた小石を見付けました。

これは奇麗な石だなと、拾ひ上げて見ますと、黄色に光る小石です。アマポラはこれは好い物を見付たと、腰にさげて居る巾着の中にしまひました。

その内、また同じやうな小石を發見ました。さうなると、お池遊びをするよりも、光る石を發見る方が面白くなつて、いつか一生懸命に、堀つてはあつめ、拾つては巾着に入れ、巾着の口が張切るまでに詰込んだので、もうこの位にして還らうと起上つたとたんに、誰かわからない大きな手がアマポラの肩にかゝつたと思つた時、いきなり風呂敷のやうな物で、頭からす

つぽりとかぶせられました。

びつくりして、お母さんを呼ぼうとした時、手拭のやうな物で、口の上を、聲の出せないやうに、ギュツと縛られて了ひました。

いまは眼も見へないのです、聲も出せなくなりましたアマポラは、兩手と兩足でバタ狂ふより他仕方がなかつたのですが、それも、強い〳〵大きな力の人に抱きしめられて、アマポラの身体は、輕々と引抱へられ、何處かへつれて行かれるのです。

〔ア〕　マポラは、怖さと、苦しさに、聲を限り、力を限りに叫びもし、遁げもして見たいと、もがいて見たのですが、身は、そのたびごとに一層強くしめつけられて、呼吸もつまりさうになるのです。

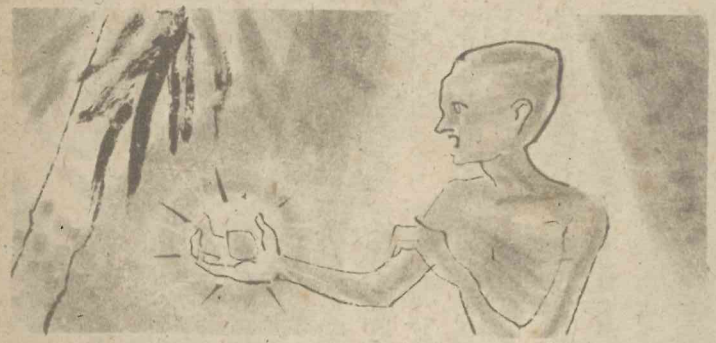
その中、耳にきこえたのは、ジャブ〳〵と河を渉つてゆく水の音です、すると、直ぐ近くに、馬の嘶く聲がきこえました。

馬に乘せて連てゆかれては、どんなに遠い處につれてゆかれるかわからない。眼が見えれば行く道に眼印をつけて、それをおぼえて居つて、傳つてかへれば分るのですが、何も見えなくされて居るアマポラにはそれも出來ないのです。

いま此の手から離れなければ、二度とお母さんのところにはかへられないと思ふので、アマポラは全身

の力を兩腕と兩脚にこめて、バタ狂つて見たのです。が、抱へて居る男は「えーイ、小癪な小僧だ」と云つたまゝに、無雜作に引抱えて、エイと懸聲をかけたと思ふとアマボラの身体は、馬の背の上にほりあげられて、續いて躍乘たその男は、前膝の上にアマボラの身体を横にすると、カツポカツポカツポカポと、馬を駈出させました。

〔斯〕してアマボラは、何處に連れてゆかれたでせう。アマボラは、泣けて〳〵仕方がありませんでした。何故私はお母さんから離れて、ひとりで河原



なんかに出たのだらう、そして何であんな光る石なんか拾つたんだらうと思つた時、ハツとアマボラは嬉しい春が頭の中に光つたやうに思はれました。

〔左〕様だ此の光る石を、ソツと馬の上からまいてゆけば、馬の通つた路に、これが光つて殘つて居るに違ひない。それを傳つてかへれば、お母さんの處に間違なくかへられるのだと云ふ考でした。

これはよい事を考へついたと思ふとアマボラはわざとグタリと馬の上に横にくつついて、引抱へられて居る腰の横に下つて居る自分の巾着の口をソツと開げました。

そして少しつゞ〳〵摘んでは、パラ〳〵パラ〳〵とまき始めました。

引抱へて居る男は氣が付かないのです。アマボラは斯してまき〳〵運ばれてゆきました。

巾着の中の小石は、だん〳〵減つてゆきました。アマボラは如何、か此の石のある間に、行く處まで行つてくれるやうにと祈りました。

すると、袋の底に、まだ十粒ほど殘つて居る時に、馬はハタととまりました。

「オーイ、捕まへて來たぞ、てうど親方が御注文のこゝろあいの小僧だ、さア下すぞ。

と云つたと思ふと、アマボラの身体は、誰かの手に渡されて、馬の上から下されました。

口の上を縛つた手拭が取除けられ、頭からかぶせてあつた風呂敷がとかれると、アマボラは始めて自分をさらつて來た男や、そこに自分を取圍んで立つて居る知らないインデアンの人達の顏を見ることが出來ました。

怖さと、かなしさに、ソーツと聲をあげて泣出しました。

〔泣〕かなくてもいゝ、貴樣アな、あの親方の天幕で、親方の煙管に煙草をつめてあげるのだ、それに圍爐裏の火の消へないやうに薪を添へて、火を續けて置くだけの用事だ。

よく勤めれば、親方は可愛がつて下さるよ。逃げたつてだめだぞ、此の見はてもつかぬ廣い原だ、どつちから來たか方角もわからない原に、逃げたら狼に追かけられて、よつてかゝつて餌にされて了う。

アマポラは眼をあげて、草原の上を見ますと、それから少しはなれて、同じ色の花が、チラ〳〵チラチラ、間隔を置ては、ズツと一列に遠く〳〵つづいて居る事です。

アマポラは、あぶなく大きな聲を立てるところでした。嬉しかつたのです、今度は違つた心持から、涙がまたポロ〳〵と頬を傳ひました。

アマポラは、此の花に教へられて、原の中を一文字にいきのつづく限り、足の續くかぎり、飛んで〳〵、自分の部落の天幕を見つけた時には、うれしくて、草の中に泣到れました。

〔お〕父さんとお母さんに、兩方から抱へられて、なつかしい自分の天幕の中で、此の話をした時に

あの光る石なら此の河原にはいくらでもあるのだが、それから花が咲くのなら、これから私等が山にゆく時、原にゆく時、これをまいて歩いたら、その跡に花が咲けば」「これはお父さんの行つた跡だ」「これはお母さんの歩いた跡だ」と行先きがよく分るといふので、それから後は、此の部落のインデアンは、歩くたび毎にまいて歩いた光る石が、いつか重なりかさなつて、カリホルニヤの全土に蒔かれたと見へて、毎年五六月の頃になると、カリホルニヤ全州には、奇麗な黄金色の花が咲くのです。

その花の咲く下の土を堀ると、屹度光る石が出るのですが、それは石ではなくて、それは砂金なのです。今日の亞米利加の人達が、カリホルニヤに入つてから調べたので、それを調べた學者の名前をとつて此の花の名を「エショルチア」草といつて居ります。

足跡に花が咲き、足跡に黄金が出る、アメリカの榮えるのも無理のない事でせう。（終）

草ものがたり

中西壽六

私は子供の頃、山や野を一人で歩き廻つて虫や草や木などをお友達として遊ぶ事の樂しさを知りました。それはいつの間にか私が大人になり煩雑な社會へ出てから後も樂しい趣味の一つとして續いてゐますし、またその様な趣味が今の私に與へてくれる喜びの中には少年時代のそれに通じる純粋さがあるやうです。諸君も生物はお好きだと思ひます。生物の正しい名前や、形、性質或はその生活してゐる有様などをよく知る事は生物達に對する一層の親しみを増す事になるのですから、さういつた事も考へに入れて今日は二三の秋の植物達について氣儘に綴つて見たいと思ひます。

モクセイ

季節も十月に入ると空の色は愈々澄み、大氣の肌ざはりも一しほ快くなつて來ます。このやうな秋の一日、靜かな陽差しの人家附近を歩いてゐて、諸君はふと、どこからともなく漂つて來る高い香氣に思はず足をとめて四邊を見廻した様な事はないでせうか。その匂ひは一本の庭木の、小さな燈をともしたやうに點々と葉蔭に群り咲いてゐる橙色の細かい花から發してゐる事を諸君は確められた事と想ひます私にはこの花の匂ひに少年時代からのいろ〳〵な想

ひが――これとはつきり捉へる事の出來ない樣な微かなものまでも―まつはつてゐるのです。そうして毎年今頃の季節に入つて、行きずりにふとこの花が匂つてくると、どんなに自分をつまらなく不幸に感じるのです。諸君もこの花の匂ひに鄕土の懷しい數々の想ひ出を秘めて、すこやかに成長してゆかれる事でせう。モクセイの名は既に諸君も知つてゐるでせうが、これは日本の樹ではなく、昔支那から傳へられたものださうで、そのとき雌株（あだばな即ち「おばな」ばかりを着ける木）だけが渡つて來たのだといひます。だから諸君は此の木に實の出來てゐるのを見た事がないでせう。花を一つとつてよく調べてごらんなさい。「めしべ」は退化してゐます、ふるさとに雌株を殘して遠い日本へ來てゐる雄株のモクセイは淋しくはないか知ら。

ジユズダマ

溝や小川のほとりで屢々見かけるジユズダマを諸君はよく御存知でせう。初秋の頃あの風變りな穗として現れる「たま」は始め綠色ですが此頃ではもう黑味を帶び、やがて枯れる頃には灰白色に變り來すつやつやしい高貴な色澤を具えたその白や黑の「たま」をとり交ぜて手のひらにころがしてみるとき、何事もたゞでは濟まぬといふ今時のセチ辛い世にあつて、このやうに美しい自然の製作品が自分の思ひのまゝになるといふ事に愉快を覺えずには居られません。諸君にも覺えがあるでせうが私も子供の頃この一つ一つの「たま」の中味を針の先でていねいにほじりとり、之に絲を通して珠數を作つたものです面倒な事ですが、それでも樂しい作業でした。このたまを恐らく諸君は實であると思ひこんでゐるでせう。ところがよく調べてみると、これは決して實で

はなく、葉鞘と謂つて葉のもとが鞘となつて莖を包んでゐる部分が厚く硬くなつたものに過ぎないのです。尤も葉の本體である葉身の部分は退化して此の「たま」は葉鞘だけから成立つてゐます。そうして本當の實は此の「たま」の中に隱れて保護されてゐるのです。穗が出た頃、綠色の「たま」を割つてみると、その中にはちやんと「めばな」――この「めばな」が、やがてたまの中で實を結ぶわけなのです――が收つて居り二本の花柱だけを「たま」の頂の小さな孔から外へ出してゐます。同じ孔から「をばな」をつけた穗の軸が共に出てゐる奇妙さも、この「たま」が葉鞘と解つてみれば當然の事と頷かれますね。自然の神樣は案外いたづらがお好きと見えて、このほか多くの植物について、蕚や莢を花辛に似せたり、枝を葉に見せかけたり、莖に根を想はせるやうな形を與へたりなさる場合がありますから、諸君も神樣のこのやうないたづらにかつがれないやうによく研究して下さい。

ナンバンギセル

多くの植物達は葉綠素と呼ばれる綠色の色素を持つてゐます。草や木の葉などの綠色に見えるのはそのためですが、こんな事はあまり普通の事なので諸君はこれ以上立入つて考へて見た事もないでせう。然し之には大變重要な意味があるのです。植物達には炭酸ガスと水とから、その生活に必要な澱粉や砂糖などをこしらへるといふ實に驚くべき特殊のはたらき（この働きを炭酸同化作用といひます）があります。これは如何に進歩した科學を誇る私達人間でさへ今のところ一寸直似の出來ない事なのです。若し私達にそれが出來れば近頃やかましい食料問題なんぞ一ぺんに解消してしまふ筈ですね。扨て、植物達がこの大切な作用を行ふ事が出來るのは先に述べた葉綠素といふ綠色の色素が存在するからこそで、

この色素が太陽の光線の力を借りて以上の働きをやつてのけるのです。これで諸君は植物達が綠色に見えるといふ、平凡な事實の中に驚くべき秘密が潜んでゐた事がお解りになつたでせう。ところで私が何故以上のやうな事を諸君に知つて頂きたかつたかと申しますと、それは一つには、これから私が綴らうとする風變りな植物ナンバンギセルについての諸君の理解を深める助けともならうと考へたからです。

ススキの穗が美しく出揃ふ頃、その根元のところに注意してみると異樣な感じの植物を見出すことがあります。高さは二〇糎位、地際のところから數本枝分れしてその先におの〳〵一個の紫色がかつた赤い筒狀の花を横向きにつけてゐるだけで、葉らしいものは全然無く、花房そのものが地上につゝ立つてゐます。横向きの花を着けた一つ〳〵の花梗の感じが一寸キセルに似てゐるのでナンバンギセルの名があるのです。或はまた、その差しうつむいてゐる花の樣子が何事か思案してゐるものゝやうにも見えますので一つにオモヒグサといふ名があり、遠く萬葉集にも、このオモヒグサの名で詠まれてゐます。この植物はそのかたちが奇拔なばかりでなく、全々綠色の部分がなく、濁つた黄色の肌に紫赤色の切れ〻〻の條模樣を持つてゐるに過ぎません。つまり先に述べた葉綠素を全々持つてゐないのです。だから澱粉や砂糖などといふ自分の生活に必要な養分を自分の力で作る事が出來ません。そこでこの植物は芽生えるとすぐにその根の先を近くのススキの根の內部へおし入れ、ススキが拵らへた養分を横取りして生長して行くのです。獨立の生活を行ふ事が出來ずこのやうに他の厄介者となつて一生を送らねばならないこのナンバンギセルといふ奇妙な植物について諸君はどう考へますか。横着な奴だとも思へるでせうし、考へようによつては、このやうな運命を脊負はされて生れて來るなんて可愛さうな氣もしますね澄んだ秋空に向つて紫や銀色の穗並をうち振りながらたはむれてゐるススキ達の、その根元の人目にたゝぬ蔭で思案顏に首をかしげてゐるナンバンギセルは一體何を考へてゐるのでせう。

シューベルトの話 黄金の蝶

新田左武郎

今日では音樂のシューベルトといふと、いづれの國の人でも、「歌のシューベルト」としてその名聲がひびいてゐますが、シューベルトが本當にその天才を廣くみとめられて、人々から樂聖と仰がれるやうになつたのは彼の歿後でした。かの有名な「未完成交響曲」も彼が亡くなつてから、三十年も後に初めて演奏され、その音樂の持つ無上の清純さと限りないしづかな愛のしらべは、聽く人々を深く驚かせたといふことです。

さて、その頃シューベルトは今の獨逸ウインのノイウィーデン街に獨り住んでゐました。彼の住んでゐたアパートは二階の方の貧しい小さな部屋でした。その時分すでに彼は數々の名曲を作曲して彼の天分は搖ぎないものとなつてゐましたが、今日のやうに一般にその名が知れてゐませんでしたので、彼の天分を愛してやまない數人の親友と少數のこの國の教養のある人々に理解されてゐた程度でした。それで彼の樂譜の出版や演奏會の收入等も僅ばかりであつたのでシューベルトは始終、友人の家に間借りしたりして貧しい暮しをしてゐました。しかし作曲にたいする情熱はこれによつていさゝかもくじけることはなく、その溫かい友情の中に心たのしく作曲に精進してゐました。

ところが、シューベルトはそれらの親友のうち先にシュパウンと別れ今度またショーバーとも別れたのです。ショーバーと彼とは最も親しくまるで兄弟

のやうにしてゐました。今度シューベルトが貧しいこの屋根裏のアパートに移つたのは實は、このショーバーが俳優になるため他の市へ行くことになりその家を引拂つてしまつたので、彼の家に同居してゐたシューベルトは仕方なくこのアパートに移つたのでした。

その上、シューベルトは最近身體を惡くしてゐましたので、益々、收入の道も少なくなつて、冬の寒い部屋にストーブも焚かず又時には五線紙も買ふことができませんので樂想が浮ぶと、有合せのノートに線を引いて凍る手先で作曲をするやうなこともありました。

それでも、その頃彼は自分が力を入れて作曲した歌劇がある劇場で公開されることになつてゐましたので、そのことに非常な希望をつないでゐました。ところがある日その劇場の支配人から急に上演することを斷はられてしまひました。

彼はこれらの重なる不幸にあひがつかりしてしまつて、『私の歌劇がどうであるかはたゞ神樣が知り給ふだけだ。』といつてその夜、冷たい毛布にくるまつて倒れてしまひました。あまりの疲勞と失意のためか彼はまるで深い淵にひき入れられるやうにそのまゝねむつてしまひました。

ところが明け方に近づいてからかシューベルトは不思議な美しい夢を見ました。それは彼が最近、熱心に作曲してゐるウイルヘルム。ミュルラーの詩による『冬の旅』といふ一れんの歌曲の中の一曲『菩提樹』といふ歌の作曲をしてゐるのでした。すると煤けた天井からするすると一匹の親指ほどもある黃金の蜘蛛があらはれました。その蜘蛛は彼がその曲を作つてしまふまでぢつと彼を見守るかのやうに動かず、彼が作曲を終へてピアノでその曲を演奏すると絲にぶら下つた蜘蛛はたのしさうに音樂のリヅムに合せて搖れてゐるのでした。演奏がすんで彼が立ち上つてその蜘蛛に近づかうとしますと蜘蛛は彼からかくれるやうに、するすると昇つてはや、どこにも

姿が見えなくなつてしまひました。

『不思議だ！あの黃金の蜘蛛は!!』

シューベルトは思はず大きな聲をあげて叫びました。その途端、彼は夢からさめてしまひました。

彼が目をさますといま夢の中で作曲した「菩提樹」の樂想がハツキリと彼の頭に浮んでゐるのでした。彼はもう考へることもどうすることもいゐませんでした。やおら立ち上つて五線紙を引き寄せるとペンの走るのももどかしさうに一氣にその作曲をいたしました。

書きおへてピアノで演奏するとその歌はさきほどの夢の通り彼の貧しい部屋には、まるで天上の樂かと思はれるほどにこんこんと美しい崇高いしらべが流れました。たゞ夢の中とちがつてゐるのはあの輝やく黃金の蜘蛛がどこにも見あたらぬことでした。

その間に夜は明けそめて冬とはいひながら靜かな日が東の空に明るく昇つてゆくのが窓から眺められました。彼は昨日までの苦惱を忘れたかのやうに爽かな氣持になりました。シューベルトは靜かに窓にもたれて昨夜の不思議な夢のことを考へてゐますと朝もその中から彼がかつて作つた『子守唄』の合唱がきこえて來るのでした。

ねむれねむれ母の胸に
ねむれねむれ母の手に
こゝろよき　うた聲に
むすばずや　たのし夢。
……　……

あれはぼくの作つた子守唄だ。シューベルトはほのぼのとうれしくなりました。そのうたをうたつてゐるのは彼と同じアパートに住んでゐる婦人達が階下の洗濯場でたのしさうにうたつてゐるのでした。

その歌を聞いてゐると彼はこれまでどこで聽いた自分の歌よりも美しく思はれました。それは今朝のシューベルトの氣持が「黃金の蜘蛛」の夢以來、とても明るい希望に、誘はれてゐだからでせう。

『よし!!これからは貧しいあのやうな人々にも、

ぐ歌へるやうなやさしくて美しい曲を作らなければならない。あれ!!あんなに心からたのしく歌つてゐるではないか!!」

その朝シューベルトはいつにない滿足の心で食事をすますとあはたゞしく友人の家へ出かけました。それは、最近シューベルトを助けるために、彼の友人の手によつて彼の作品演奏會が行はれることになつてゐました。彼はその朝友人に會つてかの「菩提樹」をはじめ新作、數曲を示してこれを演奏曲目に組み入れてくれるやうにたのみました。

シューベルトの作品が當時有名な歌手フォーグルや其他の演奏家によつて市の公會堂で公演されることになつたのは、それから間もないことです。

シューベルトはこの前二回の演奏會があまり評判がわるく、かなり落膽してゐました。それで、今度の演奏會でもみんなが自分の作品にどんな樣子をするかといふことについて、心配をしてゐましたが、いよいよ演奏會の蓋をあけてみると驚いたことに會場は滿員の盛況でどの作品も非常に喝采されました

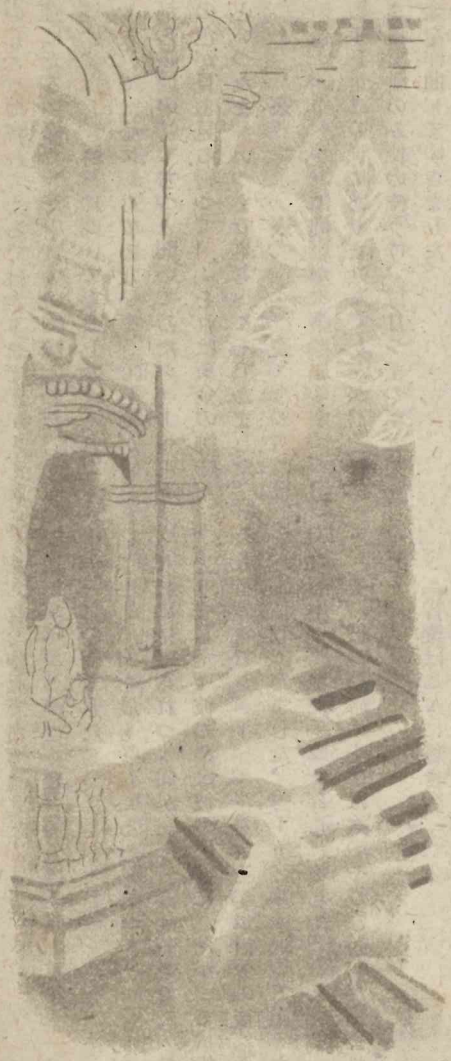
そしてこの會は滿場の涙と共に終りました。淋しい感じの幾つかの歌曲が歌はれると、聽く人の若い娘も、婦人も男でさへもみんな泣き出してしまひました。高雅な曲目が演奏されると人々は我を忘れてその限りない樂の泉に浸つて、まるで天上の音樂のやうに人々の心を深いあたゝかい祈りへみちびき入れるのでありました。

あまり盛んに喝采されて、觀客はしきりに作曲者シューベルトの名を呼びました。人々は彼に舞臺に出るやうに望みました。

この時、シューベルトは友人のアンセルメと共に一番奥の棧敷に座つたまゝ、どうしても舞臺に出ようとはしませんでした。それは彼がとても古びた服を着てゐたからでした。そこでアンセルメは自分のフロックをぬいで早くそれを着て舞臺に出るやうにすゝめましたが、内氣なシューベルトはいつまでも出ようとはしませんでしだ。

それでも觀客はまだ叫びをやめようとしないので支配人が舞臺に現はれて、シューベルトは今ここに來てゐないといつて、斷りました。

この演奏會が終つてシューベルトは親しい友人たちと街でお茶を呑んでゐました。その時一人の友人が突然、



『ぼくは今晩の演奏會でとても不思議な物を見たよ。ぼくは客席の前の方にゐたんだが、舞臺の天井から一匹の親指ほどもある黄金の蜘蛛が天井から下りてきて、ずつと演奏が終るまで垂れ下つたまゝ聽いてゐるやうでした。それはかなり天井の隅の方でしたが、その蜘蛛は曲の演奏が初まると

たのしさうに搖れてゐるではありませんか！それは確に光る蜘蛛でした！黄金の蜘蛛でした。』

友人達は、ふしぎさうに聞いてゐました。それでもあまり大しては心にかけてゐないやうでしたが、さつきから暖爐の傍でぢつと聞いてゐたシューベルトは顏の色が見る見る變つて、『それは黄金の蜘蛛だ!!』といつたまゝいつまでも考へこんでゐました。

※　※　※

その後シューベルトは健康が次第に惡くなつて、僅か數年しかこの世にありませんでしたが、それからはまるで神のみ使のやうに、毎日つぎつぎと美しい音樂を作曲してゆきました。

それは黄金の蜘蛛の絲が織りなす音樂のやうにどの曲もどの曲も限りない美しさに充ちみちてゐました。彼の音樂はどんな不幸な人々の心をも清め、母のやうに溫かい愛の言葉をさゝやき、その寶玉をならべたやうな美しいしらべは、常に人々をして天上の世界を憧憬せしめるやうな高貴な魂のあふれた作品でありました。

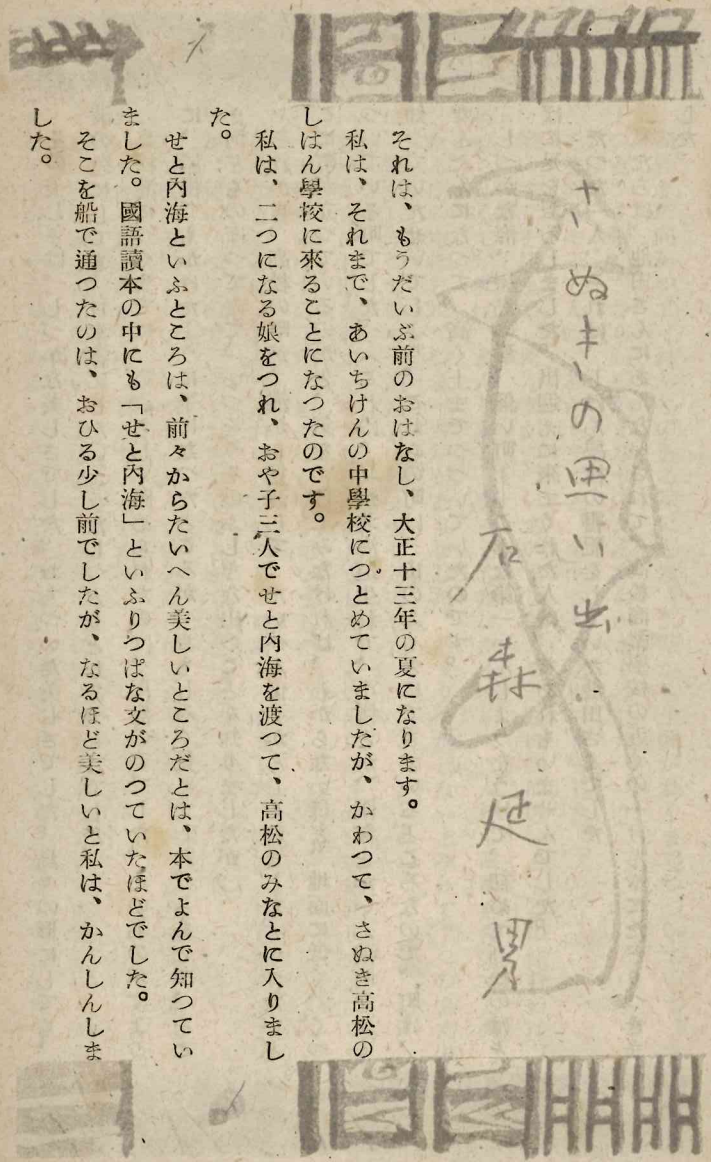
シュベルトが亡くなつたのは一八二八年十一月二十一日の朝でした、

生前、彼を最も愛してゐた兄フェルデナントや友人達に見守られつゝ僅か三十一歳の若さでこの世を去りました。彼の墓は彼の遺言にしたがつて、偉大な音樂家でシューベルトをひそかに自分の後繼者だと信じてゐました、ベートベンの眠つてゐるウィンの中央墓地に手厚く葬られました。

その彼の墓碑の上には次のやうな詩句が刻まれました。

『音樂はこゝに尊き寶玉と
いと美しき希望を埋めぬ。』

— 終 —



それは、もうだいぶ前のおはなし、大正十三年の夏になります。

私は、それまで、あいちけんの中學校につとめていましたが、かわつて、さぬき高松のしはん學校に來ることになつたのです。

私は、二つになる娘をつれ、おや子三人でせと内海を渡つて、高松のみなとに入りました。

せと内海といふところは、前々からたいへん美しいところだとは、本でよんで知つていました。國語讀本の中にも「せと内海」といふりつぱな文がのつていたほどでした。

そこを船で通つたのは、おひる少し前でしたが、なるほど美しいと私は、かんしんしました。

その美しさは、しづかな美しさでした。おちついた美しさでした。島々の形にしても、波の色にしても、日本畫にしたいようなしつとりとした美しさでした。

高松港につくまでに、めづらしく眺められたのは、屋島の姿でした。その名の示すように、屋根でもかけたように平になつたところが、おもしろく見えました。（あとで、そこえ何どものぼつてみて、いつそうそのふしぎな山のことを知りましたが、）

それから、高松の町が、海から見渡して、たいへん低くかんじられました。いつたいどこに町が立つているのかと、氣をつけてみなければ、わからないほど、地面に低く、くつついている町でした。（これは、私が北海道生れで、小樽とか、函館とかいふ港町をよく知つていたせいでしよう。これらの町は、山のふもとにできているところなので、町は、だんだんになつて、高く上までつづいていたのです。

しづかな海、屋島の形、低い町——こんな第一いんしようをうけて、初めて高松のはとばに足をおろしました。出迎えに來てくれた人は、だあれもいませんでした。

たつた一人、それは、しはん學校の書記をしていた池田さんでした。

私たちは、池田さんにあんないされて、高松商業學校の近くの一けんやにたどりつきました。

表通りに向かつて、れんじのある家でした。玄關から土間がおくまでつづいていて、ちよつとうす暗く、うら庭にかぎなりのえんがわがありました。

そこでおや子三人は、旅からやつと、おちつくことができました。

家のすぐそばまで、たんぼがつづいていました。こんなに畑に近いところに住むのは、めづらしくて、私は、れんじから、青々とした、たんぼを、ぼんやり眺めわたしました。たんぼの中ほどに、つるべ井戸がありました。あまりつかわないとみえて、このあたりに、草がしげつていて、道なども見えませんでした。

井戸から少しはなれて、小さな池がありました。その池にはすがいちめんに生えていてうすべに色のはすの花が、いくつか咲いていました。

こんなところに、あんなきれいな池のあるのにおどろきました。私は、住む家のまわりが、氣にいつたので、すぐおちつくことができました。

二つになる娘をだいていつて、れんじのところに立たせ、れんじにつかませてやると、わけもなく足ぶみをして、喜んでいました。

この家の家主さんだといふおばあさんが來てなにかとせわをしてくれましたが、その話すことばが、今までいたあいちけん、三河のことばとは、すつかりちがつていました。

こちらは、いかにもものやわらかでした。
あちらは、三河武士のなごりともいふものが、あるのでしようか、どこかきついところが、ちよいちよい耳にさわつていました。
その日の夕方、私は、しはん學校の校長石川さんのおたくをたづねました。
なんでも天神町といふ町でした。ふぞく小學校のそばの、大きな松の木のそばでした。
ちかくに圖書館もあつたとおぼえています。
二階にとおされました。おくさんがでていらつしやいましたが、体格のりつぱなしんせつなおくさんでした。（このおくさんとは、大連で、おとなり同志といつた親しさを味うことになりましたが、おしいことにお亡くなりになりました。）
石川さんは、口かづの少い、けれども、一たん口を開かれると、じつにはつきりとしたものをいわれる方だと、思ひました。
私は、二階のおへやから、その松林の美しさをかんじたままお話をしてかえりました。
學校は、まだ、夏休み中で、あと一週間ばかりで、授業がはじまるから、九月一日に出てくるようにといわれて、家に歸りました。
私の家から、しはん學校は、すぐ見えました。白い二階だてのかつちりとした校舎で、

紫雲山を背景に、たつているようすは、なかなか品のいゝものでした。
石川校長が、私をこの學校にひつぱるための手紙の中に「校舎も新しくて氣持がいゝ。」といふ一句がありましたが、なるほどこれなら氣持がよさそうだと思いました。
けれども、學校といふものは、いくら校舎がりつぱでも、せつびがとゝのつていても、中味が、――つまり生徒や、先生たちが、おもしろく、氣があはなければ、けつしていゝ學校といふことはできません。私は、はたしてこの學校の中味が、氣にあうかどうか、少なからず心配しました。
九月一日の二學期はじめまで、ひまがあつたので、私は、市内を見物してみようと考え次の日あたりから、娘のみちをつれて、ぶら〳〵あるくことにしました。のみちは、なか〳〵發育のいゝ子でしたので、抱いていては、重いので、ふんぱつしてうば車を買ふことにしました。新しいうば車にのみちをのせて、さつそう(?)と、あの平な通りを、から〳〵と車をおしました。
一ばんはじめにいつてみたところは、栗林公園でした。名高い公園だけに、手入れがよくとどき、池のつくり方や、橋のかけ方や、木々の植え方など、みな心をひきました。
ことにそてつ林は、りつぱに見えました。（このそてつ林の中で、私の弟が高等商船學

校時代に、寫眞をうつして、送つてこられたことがあるのを思いだしなつかしくもありました。その弟も世界一週の遠洋航海直前に死にました。）

のみちは、池の中をたくさん泳いでいる鯉にふをやつて、大喜びでした。あまり喜ぶので、これからほとんど毎朝のようにふをやりにでかけたものでした。

―つづく―

學習手引ちからだめし

算數篇

理科篇

國語篇

三 春 月

女學生 中學生

となられる

皆さんへ

お勉强の手引となり、皆さんの入學受驗準備仕上の爲に、熱心な先生方に依つて、ちからだめしの本が出來ます是非手もとに一冊宛はそなへて自習の手引にして下さい。そして是非この本によつて來春は見事かがやく中學生女學生になり下さい發行部數が限られて居りますから、今すぐ申込んで下さい。

白風館出版部

硯滴

前川佐美雄

今朝とみに秋をしきりに感ずれば座を高くしてわれはあるべし

十月の朝空ふかく澄みつればわが貧硯をすすがむとする

今よりは如何にこころをやしなひて來む新しき世にをあるべき

貧硯をあらはむと井戸の水汲めりみづもすずりも秋の冷たさ

山の上への水のたたへに照る月を心さびしむ夜ごろとなりぬ

沈默の身となりはててしらじらと秋の河原の石にまじれる

うたかたに日は照りをれどどぶどろの泡沫なればなぐさみはせず

まむかひのそぎ立つ山にかかりたる昨夜の嵐の白き水見る

はや秋と思ほゆる空を鳴きわたるしづかなる雁の列なりしかな

馬追のこゑきくこともなかりしとひとりごちつつ秋の夜を寢る

ニヤン吉の失敗

仲弓度象郷村 初六 根津武夫

猫のニヤン吉は、生れつきあはて者であつた。それは去年の秋のある日のこと、

「あ父さん、ぼく今からブーちやんとこへあそびに行くよ」

「うんよしよし、けがをしないでね、」

子供のニヤン公が、すぐ北側にある大工の豚さんの家へあそびに出かけてから、十分ともたゝないうちニヤン吉は自分の家のすぐ前に、黄銅色ににごつた流れの早い小川の岸に腰かけてゐた。と、突然、岸の土が「ドドドド」とくづれてニヤン吉は川の中へおちてしまつた。

「あツ」と叫んで、「助けてくれえ」と聲を出さうとしたが、不幸にも、にごつた水が二三ばい口の中へはいつたので、いふことが出來なかつた。ところへ天の助けか犬のワン太郎警官が通りかかつた。ワン太郎は泳ぐのが上手だつた。そのまゝドブンとびこんで、ニヤン吉を救ひにかかつた。

ようやくニヤン吉をきしへ引きあげたときは、もうぐつたりとして呼べども目をあけず返事もしなかつた。ワン太郎警官は急いで附近の者を呼び集めてかいほうしたがそれから間もないある日死んだのであつた。ニヤン吉が死ぬとき、ニヤン公を枕もとへ呼んで、

「わしの命は、もうこれでおしまいだ、お前はあわてずに、失敗などは決してしないでくれよ、これがわしの一生の願だ。」

と云つて、きかせたけれど、ニヤン公も生れつきのあわて者はなほりさうもなかつた、

∴

ニヤン吉が死んでから間もないある日、村長さん馬のヒン兵衛の家の前に次のような紙がはり出され

た。

「この間、猫のニヤン吉さんがなくなられたことをきいて、大へん氣のどくに思ひます。ところでこの動物村には、ひとりの醫者もゐません。醫者がゐたならば、あのときもニヤン吉さんは助つてゐたことと思ひます。ですから私の村には醫者が必要です。皆さんのうちに醫者にならうと思ふものがあれば、三日間のうちに私のところへきて下さい。どなたでもよろしい。そして十月五日に選擧して、當選した方に、町へ半年間醫者の勉強して來てもらいます。十月五日には子供の方も選擧してもらいます。當選者は十月十日出發來年の四月十日頃かへつて來てもらうよていです。

十月一日　動物村長　馬のヒン兵衛

その日も次の日も、はり紙を讀だもので村長さんの家の前は一ぱいであつた。一番のりに申しこんで來たのは兎のピョン六、二番目は鷄のコケツコ太郎三番目が牛のモー吉、次が犬のワン助、五番目が猫ニヤン公である。みなニヤン公が出たといふので大笑ひ。やがて十月五日、選擧場所は村長さんの家。その日朝早く、

醫者になるこうほ者

兎のピョン六
鷄のコケツコ太郎
牛のモー吉
犬のワン助
猫のニヤン公

といふはり紙が出された。

ニヤン公はいつもより早く起き急いでヒン兵衛の家へ行つた。

「ニヤンちやん今日は馬鹿に早いですな」

「へー今日ばかりは」

といつてニヤン公は頭をかいた。「ガラ〳〵」と戸があいてコケツコ太郎とワン助がはいつて來た。

「村長さんお早うございます」

「村長さんお早うございます」

「やーお早う、おそろいで」

コケツコ太郎はニヤン公に

「ニヤンちやん、今日は私より早く起きたんだね

「うん、今日はな、」とニヤン公は、はづかしさうにいつた。そのとき

「村長さん、外には早たくさんの者が來てゐますよ。もうはじめたらどうですか」

といひながらモー吉とピョン六があいさつもしないで、はいつて來た。

「さうか、」ヒン兵衛は戸口に立つて

「さあ〳〵みなさんはいつて下さいよ」

みんなガヤ〳〵はいつて、ヒン兵衛から紙をもらひ、名前をかいて投票箱へいれてはかへつて行くニヤン公は氣が氣でない。ニヤン公ばかりではないピョン六もコケツコ太郎もモー吉もワン助もさうである。動物村に醫者が出來ると云ふのでみんな投票に來てゐる。それが終つたのが、正午少し前であつた。

「では、こうほ者の方は食事にかへつて下さい、四時から投票箱をあけることにします」

と、ヒン兵衛がいつたので、それそれかへつて行つた。

四時になり開票となつた。村長ヒン兵衛以下一生縣命に調べ終つて、その成績をヒン兵衛の家の前へはり出した。ニヤン公は見事落選してゐた。太陽が山へしずむころには、ヒン兵衛の家の前は成績を見

こどもの國 作品募集

童話　つづりかた　詩　童謡
短歌　俳句　まんが等

◎先生にお願ひして出來るだけ一まとめにして送つて下さい。
◎締切は毎月十五日としますが、いいものがお出來になつたらいつでも送つて下さい。
◎送先は「こどもの國」編輯部へ

にくるもので一ぱいだつた。

本日の選擧結果次の通り

當選　犬のワン助君　二二五票
次点　兎のピョン六君　一五三票
　　牛のモー吉君　九六票
　　鶏のコケツコ太郎君五一票
　　猫のニヤン公君　〇票

「なーんだニヤン公君一票もないぢやないか」
「ワン助さんを見ろよ二百二十五票もはいつてるぜ、えらいえらい」
「ぼく牛のモー吉さん投票したのに落選か、つまらないな」
「兎のピョン六さん當選するかと思つたら、次点だつたのね」
「コケツコ太郎さん五一票で四番ね」
こんな聲がやかましくてゐられない。
「みなさん〳〵しづかにして下さい」
とヒン兵衛村長は注意して、正直者であるガーハを呼んだ。
「ガーハさん、あなたはだれを投票したのですか」
「はい、私は當選したワン助君です」
「どういふわけで」
「それはかうなんでございます、猫のニヤン公のようなあはて者を投票しても、とんな醫者が出來るでせうか、といつてコケツコ太郎さんではしんさつするのに羽ではむつかしいです、かうなるとモー吉君とピョン六にワン助、モー吉では急病人のときにどうでせう、ノツコリノツコリあるいてゐたんでは間にあいません。だからピョン六とワン助君です。ピョン六さんは早いには早いがワン助君とくらべると頭がちがいます。ワン助君は、こうぼ者の中で走るのが一番早く、頭が一番いゝからです。」
「ほう！」
ヒン兵衛はいい者が當選したと心のうちでよろこんだ。

（つゞく）

短歌

○　高一　三木惠子

天井につりさげありしとんぼぞうり
一つ一つに風のあたれる

○　高一　鴨田扶久子

村道を赤い日傘のならびゆく
朝の光のしばしひととき

○　高二　佐野隆子

ひつそりと靜かな晝に母と來て
お墓の前にたゝづみにけり

○

とうがらし赤や綠の實をつけて
實の重ければ地にふれてあり

○

道のべのわづかばかりの地をよりて
植えたる田芋子をましにけり

（師範女子部附屬校）

○　初六　袴田長男

ながし場の下に忘れし馬鈴薯も
いつか小さき芽をばふきたり

○

校庭にあそびつかれてかへる我
くつをぬぐえば砂のこぼるる

（大川、白鳥本校）

○　大濱校高一　桑原義美

ほのぼのとまだあけきらぬ曉の
靜けさやぶる山鳥の聲

俳句

秀逸

大濱校初五　大坪喜美子

ひき汐の岩間をいそぐはぜの群

仁尾校初四　塩田博志

月が出たすみえのような寺の棚

豊田校高一　峯雄

秋雨にぬれてひいてる樵かな

喜通寺中央校初五　宮武多津子

そよ風にへちまの花の屋根にあり

城北校初六　新正子

卷雲のうすれて涼し赤とんぼ

榎井校高二　上村邦夫

桑の穗にぬれたる月のかかりけり

神野校初五　藤井功子

教室に秋の名草をかざりけり

神野校初六　横關敏子

梅雨ばれに早稻のみどりのひかりゐる

相生校初五　藤井保武

電柱の影ながながと月の照る

城坤校初六　太田正雄

さやさやとかるく波うつ稻穗かな

廣島校初五　鈴木マスミ

波の音きこえて松に月がかる

坂出中央校高一　久保秀夫

涼み台みんな集りカルタ取り

吉野校初五　須藤ミユキ

しぶ柿の葉も色づいたほんのりと

相生校初五　中島健治郎

とび魚のはねる背にも秋日照り

河内校初四　大矢正義

山の端にちらとのぞいた夏の海

城北校初六　川西千鶴子

川岸の柳をぬうてほたるの火

佳作

疎開地で虫の聲きき夕涼み　善通寺中央校初六　北條淑子

朝つゆに足ぬらしつつ墓まいり　大濱校高一　小黒朝子

西晴れて東をみれば虹二つ　吉野校初六　布谷てるみ

日本晴まちつつ今日も水泳着　城北校初六　細川方子

夕立のはれま美し虹の橋　大濱校　北畑カズヱ

蓮の花二日三日とちりにけり　神野校初六　松良きよ子

かえりゆく峠うれしや汗をふく　詫間校高一　谷川貞雄

夕空をしづかにわたる雁の群　紀他校初五　合田稔

俳句

かんしょう

新田　冬果

俳句は野路にかゞやくあさ露のように、小さくとも一つ一つが生きいきとした十七音の文字で、むかしからこの國によまれてきた短かい四季のうたです。

限りもない天地の曙に手をさしのべてゐるつゆ草の玉をみてゐると、すべて地上に生れでたものゝ、それはどんなに小さなものでも、まづしいとか、つたないなどとけなすことはゆるされない。皆さんの俳句をみても自然とうたわずにはいられないでうたわれたものは、生きいきとしてゐて、その感動が讀むものゝ心をうつてくるのです。

でこゝではたゞ皆さんの俳句に感じたまゝの二つ三つをかんしようしてみることにしませう。

ひき汐の岩間をいそぐはぜの群　喜美子

面白い光景がむだなく描かれました。このやうになんの説明もいらないで讀むものに迫つてくるよい句は、ものをみる確かな眼、そしてたゞ、面白くみているだけでなく、この小魚たちの動作にまでゆきとゞいた心の働き、それをそのまゝ素直に文字にのせた三つの大きな効果を見のがすことができません。

岩影にあそんでいた、はぜの群がいつの間にか引去られているのこり汐を追つて、われ先にとかへつて行くありさまを、いそぐといふ巧みな言葉で詠まれ、秋の海邊の動いてゐる美しい景色を調子よく出されました。

原句の「ひき汐に」はさらにこの句の中心をはつきり描くために「ひき汐の」とあらためてみました。

そよ風にへちまの花の屋根にあり　多津子

忘れられたように季節をおくれたへちまのあだ花がひとつふたつと屋根にぬきんでている。あるともない風に朝夕の冷たい大氣は急に秋が感じられます。こんなありふれた所からも、うつりかわりゆく大きな自然の背景がうかゞわれます。このように取りのこされた一花二花のへちまを、とらえても立派な景色が、すらすらとよまれるものです。

教室に秋の名草をかざりけり　功子

秋も深まり、校庭ではあさも虫が繁くないています。勉強に運動にふさわしく氣のひきしまつてくるこの頃、きのうあなたが摘んだ秋草が教室にかざられました。そしてお友だちと、すがすがしい授業をむかえます。先生を中心に學校もまた、楽しいわが家です。教室をかざる秋草、季節に住むあなた方日本兒童のゆかしさがそこにあります。

しぶ柿の葉も色づいたほんのりと　ミユキ

俳句の寫生は、人間の智慧や工夫だけではできません。自然の一木一草にもいのちがこもつています。これを寫しだすのは、あたゝかい思いやりが大切です。しぶ柿が熟してきた、そして實だけではない、見給へほらあんなに葉も秋の色をかざりつゝある、と心あたゝかに、よまれています。

とび魚のはねる背にも秋日照り　健治郎

澄みきつた空、午后のまぶしい日をうけて、秋の海邊に立ち、遠くの島や船をながめていると、すぐ目の前を、一匹のボラがとび上つた。あなたの眼は、たちまち、寫眞機のシヤツターがきられたやうに、今水面にはね上つたとび魚の背一ぱいに秋日をあびていた瞬間を、とらえて、美しくよまれました。俳句は古來から、おちついた景色をよまれがちでしたが、このやうな瞬間の動作を、とらえてうたい出すことも、新しい道として、ひらかれつゝあります。

◎執筆諸先生紹介◎

久留島武彦先生　世界的に有名な童話家『こどもの國』顧問

石森　延男先生　兒童文學者、文部省圖書監修官

前川佐美雄先生　歌人、歌誌『おれんぢ』主宰

田中　克己先生　詩人

新田左武郎先生　詩人、音樂家、奈良師範教授、日本兒童音樂協會理事

今井　實先生　新進書家、新世美術協會々員

中西　壽六先生　趣味の植物研究家

新田　冬果先生　俳人、俳誌『白南風』主宰

巽　いつぽ先生　『こどもの國』編輯記者、まんが家

童詩

三行詩

○　初六　田岡　澄子

向ふから自動車がくる
みんな雨傘を横にして
まつてゐる

○　初六　田村アサ子

のき下の樋
露がすうつと走つて
ふくれては一つ　二つ

○　初五　中田美枝子

庭先の畠で
遊んでゐるにはとりを
そつとだいた

○　高一　田中　明

お手玉の石ころ
ころり手の上へ
ころり土の上へ

（仲多度神野校）

秋雨

初四　笠井　秀一

秋雨に
のこりのなすが
二つ三つ
ぬれて光つて
うれてゐる

（仲多度榎井校）

おとづれ

初五　鈴木マスミ

柿の葉が風に散る
赤い實とならんで
からすが一羽

くもの巣に
まかれた虫がゆれてゐる

（仲多度廣島校）

ポスト

初四　川上美津子

もしもし赤いポストさん
美津子のたのしいお便りを
きつとおたのみいたします
遠いお船の父さまが
私のお便りまつてるの

（丸亀城西校）

晝

初五　安田　恭平

晝ごはんをたべたら
汗が玉のやうにふきでた
すぐ井戸の水をつつて
じやぶ〳〵顔を洗つた
あとで水をかどの眞中にうつと
日の光がうつつて
まばゆかつた

（三豐粟島校）

松の木

初三　朝田　雅大

松の木に登つて
ながめてゐたら
稻のほが波のやうにゆれてゐる
汽車が走つて
煙がこちらへとんでくる
遠くの島が
きらきら光つてゐる

（仲多度神野校）

屋根の上

初四　公文　宏

晝をかかうと思つて
屋根の土にあがつたら
日にやけた屋根がわらが
もえてゐるやうに熱い
その上に
すずめのふんがおちてゐた

（師範女子部附屬校）

二羽の小鳥

初六　澁谷　精一

一羽の小鳥がいつたとさ
「ここはあきたよ里へ行かう」
一羽の小鳥がいつたとさ
「里はさむいよよしときな」
一羽の小鳥がいつたとさ
「それならよして海へ行かう」
一羽の小鳥がいつたとさ
「海もさむいよよしときな」
二羽の小鳥がいつたとさ
「やつぱりここで遊ばうよ」

（善通寺中央校）

草もち

初五　北池　加代

おとうとと
いもうとが
草もちをあぶつてゐる
大きなあみの上に

おもちをおいて
草もちのにほひがしてきた

（三豐大濱校）

夏

初四　亀井　將

桐の木で
蟬の鳴く聲
赤い花

（師範女子部附屬校）

コロちやん

初五　大井サチ子

子犬のコロちやんかわいいね
わたしが行くととんできて
おててをおひざにのせました。
子犬のコロちやんかわいいね
わたしがだくとよろこんで
やらかいからだをもたらせる。
子犬のコロちやんかわいいね
わたしのおひざで尾をふつて
ペロ〳〵おててをなめました

（三豐大見校）

夕方

初四　中村　精志

すうつと風が
小枝の間を通り抜ける
その風が
川土堤のすすきをゆすぶる
まだ
川であそぶ子供たちの
聲がきこえて來る

（師範女子部附屬校）

ジープ

初五　大坪喜美子

あめりかの
ジープにのつてみたいな
でも、何といつたらいゝかしら
ことばがつうじない
こまつたなあ

（三豐大濱校）

海

初四　松本　浩子

海を知らない　このわたし
はじめて見たのは　コロー島
青い波うつ　みなとです
お船がたくさん　ありました
松花江より　ひろいうみ
むかふのはてに　なつかしい
日本があると　きゝました

（丸亀城北校）

兒童作文

とうろうながし

二中　むらをかみえこ

とうろうながしの日に私はうたづへ行きました。わらのお舟はすつかりできてゐました、しんぶんしに「せいほう丸」とかいたほがありました。

夕日が沈んであたりもすつかりくらくなりましたわらの舟にとうろうやおそなへを入れて火もつけました。きんじよの舟もいつしよに川の中へおりて行きました。

いよいよ舟を流します、「この舟にはおばあさんのたましひがのつてゐるのですよ。」とおかあさんがおつしやいました。私は手をあはせて舟をみおくります。舟はくるくるとまひながらしづかにしづかに流れて行きます。ちやうど私たちにさようならをいつてゐるやうです、どこかの舟にはとうろうが二つものつてゐました、火がついたりきえたりします。

かへりの汽車の中であの舟はどこまで流れて行くのだらうかと思ひました。

（丸亀　城坤校）

床屋

初六　笠井悅子

ガラス戸を開けると、プーンと香水のにほひが鼻をつく。中には二三人の大人が待つてゐたが、私が入つて行つたら、皆の目が一せいに集まつたので、私は顔が、かーつとあつくなつて、どうしようかしらと、まよつた。室中には、頭を刈つてゐる人、新聞を讀んでゐる人、本を讀んでゐる人、さまざまである。もうすんで肩を並べて出て行く人もある。又入れかはつて一人大人が入つて來た。子供はだれもゐない。私はすみの方で小さくすわつてゐた。とうとうさつきの人が刈り終つたが私より先の人は臺へあがらうともしない。

「悅ちやんさきに刈つてもらひ。」といふ。

私はだれが私の名前を知つてゐるのだらうと思つてひよつと見ると、しんせきの笠井のをぢさんだつた。私は

「かまはないのに。」と赤い顔になりながらことわつたが、をぢさんはいきなり私を抱き上げて臺の上に乘せてしまつた。もう、はづかしくて〳〵おづおづしてゐると床屋のをぢさんがはや手を持つて來たのでもうおりることもできなかつた。頭の上では髪を切るハサミの音がチヨキ〳〵となる。鏡を見るとさきのをぢさんはほつぺたに笑をふくめて新聞を讀んでゐる。なんといふやさしいをぢさんぞらう。ふと鏡を見れば、前髪が長くて横がきれいになつてゐる。前掛の上には刈り取つた毛が澤山落ちてゐて、こじきのやうにきたない姿だ。そのうちに全部刈り取られた。今度は顔をそるのだ。眞白なシヤボンをつけた。眞中に黑い目が光つてゐてまるで雪だるまの顔に黑い炭を入れたやうな姿だ。自分ながらおかしくてたまらない。いい氣持になつてゐるうちに終つて臺をおりようとする時、ガラス戸を開けて又一人入つて來た。三十二三の色の白い人で長く刈らなかつたのだらう頭の毛が大分のびてゐる。

「あひかはらずこんでるな。」といつて、そばの椅子に腰をおろした。外へ出ると刈りたての頭に風があたつてとてもさむい。すーつとするので思はず頭へ手がのつた。

（小豆郡　第一土庄校）

兄ちやん

初四　寺島美惠

お母ちやんの、うれしさうな聲に、ふと目がさめました。どうしたのかとねむい目をこすりながら、おきて見ますと、お父ちやんも、お母ちやんも、ね

まきのままで、げんかんにとび出してゐます。みんなで待ちに待つた、のりゆきにいちやんが復員したのです。それは、丁度八月八日の夜十二時過ぎでした。私は、ゆめではないのか、とうれしくてうれしくて、のりゆきにいちやんの側を、はなれませんでした。にいちやんは三年前に、ジヤワに行つて、それから、一度も會ひませんでした。にいちやんが「美惠大きくなつたね。」と云つて頭をなでてくれた時は、ほんとうにうれしかつた。いろいろお話をきいて見ると、始めはジヤワに居たのださうです。シンガポールから船に乘つて、浦賀についたのだといふことです。内地へ着いた時は、涙が出るほどうれしかつたと言つてゐました。

お母ちやんが「のりゆき、少しやせたな、くらうしたのでせう。」といつて涙ぐんでゐました。

私もすまない氣がしました。お母ちやんが湯をわかしてあげて体をあらひ一年ぶりにおふろに入つたといつたので、私はびつくりしました。時計が二時を打ちました。早くねなさいと云はれて、ね床に入りましたが、私はずつと前のいろいろのことが思ひ出されて中々ねむれませんでした。のりゆきにいちやんはあくる日おばあちやんの家へかへりました。今でも、あの晩のことを考へるとゆめのやうなうれしさです。

（坂出 中央校）

心配

六女 津島桂子

迪子ちやんは、このごろほんたうに、大人のやうになつて、私が何か話かけると、わけもわからぬのに

「ふん、ふん。」

といつて首を振る。この間私が學校から歸つて見ると、迪子ちやんは、目のそばに赤ちんをつけて私の側へさもうれしさうに走つて來た。私が

「目々どうしたん。」

と聞くと、迪子ちやんは、目の所を押さへて、

「ぢいかん。ぢいかん。」

といふ。私がねえちやんに聞くと、

「迪子ちやんは、おぢいちやんと遊んでゐて、急に泣きだしたので、おぢいちやんが見ると目のすぐそばを御線香の火でやけどをしたのです。」

とおつしやつた。

「あぶないなあ。目をやいたら目がつぶれるんで。」といふと迪子ちやんは、おこつたやうに私の顔を見た。私が

「あほ。」

といふと

「あほ。」

といつてまねをする。さうして私が腰をかがめると待つてゐたやうに私の顔を

「ばちん。」

とたたいて逃て行つてしまつた。私は、その後をおつて行くと、ばあやんにひつついてしまつた。私が行くとなほひつついて行く。私がばあやんに、おつぱすると すたこらすたこらとねえちやんの所へ走つて行つて、

「おつぱ、おつぱ。」

といつたらしく、おつぱをして、もらつてこつちへ來る。私は迪子ちやんに

「迪子ちやんは、今日めいよのふしようなされたから、おかあちやんに、いつものやうにしかられんのや。」

といふと、

「かんまん。」

といふ。かんまんといふ言葉は、私がいつてゐたのを聞いてゐて、おぼえたのである。けれど私は迪子ちやんをからかふが、やけどが氣になつてしようがない。夜、迪子ちやんが寢ると、赤ちんをつけてやつた。

（師範女子部附屬校）

宏ちやんのちゆうしや

初二　小野正徳

ぼくはきのふ弟が百日ぜきのちゆうしやをしに行くのでおかあさんといつしよにおいしやさまへ行きました。赤くめをはらした人や口のよこにこぶが出た人がたくさん來て自分のじゆんばんを待つてゐました。おかあさんは宏ちやんをおつて、たたみの上にすわりましたが、ぼくは下でこしをかけて見てゐました。まもなく宏ちやんのじゆんばんが來ましたかんごふさんはおかあさんに「ちゆうしやをしませう。」といひました。おかあさんはへんじをしながら宏ちやんをせなかからそつとおろしてゐますと、かんごふさんは持つて來て宏ちやんの手につきたてました。と思ふとどうじに「きやあつ。」となきました「そらすんだよ。」とかんごふさん針を手からぬくと「ぴたり」となきやみました。そばにゐた人たちは「わあー」と一どに笑ひました。ぼくもうれしくて大いきをつきました。中の一人が「まるできてきのやうだ。」といつて笑はせました。おかあさんも急にあんしんしたやうに笑ひだしました。それから三人でおいしやさんからかへりました。忠君のいへの前にいちごの實がまつかにうれてゐました。何だかうれしくかへりました。

（三豊　上高瀬校）

終戰の思ひ出

初五　松元鐵二

去る十一日は、僕達滿洲から歸つた日で引揚一周年だといつて食後皆で滿洲の樂しかつたことや食糧の豊富であつたことなど話し合つたことでした。本當に去年の八月十三日病院に出動してゐたお父様から急に電話がかかつて來た時は本當におどろきました。それはソレンが來るから滿鐵社員の家族は疎開するやうになつたので直ぐ支度をするやうにとのことであつたので、大急ぎで荷物をととのへ貨物列車に乘りお父様達に送くられて公主嶺を出ました。四平に着いてから雨になり荷物も私達もびしやぬれになりました。早く目的の土地に着くとよいなあと思つてゐましたら、目的地の南滿の方は先に出た疎開者がいつぱいだといふので四平に止つて居ることとなりました。その間北から南へ〳〵と、どの汽車も疎開者がいつぱいで次々へどこへ行くのか動いて行きます。僕達はそれらの止る度に、どこから來られたのですかと聞き合ひました。その内「終戰ださうだ。」「日本はまけたさうだ。」「天皇陛下が御放送をなさつたさうだ。」僕達はびつくりしましたが「そんな馬鹿なことがあるものか。」「デマだ。デマだ。」といひ續けて、何度前の人からいはれても信じられませんでした。しかし何かしらん不安な氣持でした。その内汽車が出ることになつて皆で「デマ」として朝鮮の太田へ着き太田で當分の間過すことになりました。いつ滿洲の方へ歸るかもわからぬので列車の中で暮すことになりました。僕達はこんな旅行をしたことはないし、まして列車の中で暮すことなど全くゆめのやうであつた。不安で不自由であつたが何かしら不思議なものに押へられたやうにをしづまつてすごした。そしてすぐ前にあつた鐵道守備隊の兵隊さんと伸よくなり、よく聞いて見ると終戰は本當で陛下が御放送になつたのだといはれるのです。どう考へても日本がまけるなんて考へても〳〵信じられません。その内朝鮮人達が昔の朝鮮の旗をふりたて、大聲で喜びさけんで汽車で通つて行きました。そして僕達を見ると『日本まけた〳〵』といつて旗をふるのです。僕達はくやしくて〳〵たまりませんがどうすることも出來ません。日本がまけたといふことがいよ〳〵はつきりするばかりです。その内守備隊の兵隊さん達ももとの隊へ歸つてしまふし、とう〳〵僕達も進駐車の命令で内地へ引揚て來ました。滿洲に殘つた人達のことを思ひながら。日本が戰爭にまけてゐなかつたら……なつかしかつ

た滿洲が思ひ出されます。

（丸亀　城北校）

火　事

初五　犬井和美

昨日の二時間めだつた。先生からいただいた紙に問題をかきながら、ふと窓の方をみてびつくりした。一ノ谷の方から白い煙がむくむくと立ちのぼつてゐた。だれかが「あつ、火事」といつた。みんな、椅子上へ立つて爪立ちして見た。先生が「ちよつとの間見なさい。」と、おつしやつた。

みんな「わつ」と、いつて窓へかけよつた。運動場で作業をしてゐた人たちもじつと見てゐる。

しばらくすると煙の中から赤い火がちらちらと見えだした。それから煙が少くなつて火がもえだした先生が「ポスターの火の色にはあんな色を使ふといいね」と、おつしやつた。

私は燒けてゐる家のことを思つて見た。子供が泣きさけび大勢の人が、右往、左往、してゐるだらう、だれが火もとをだしたのだらう、子供かもしれない。

その時、先生が「もういいでせう。さあ今のつゞきをおかきなさい。」とおつしやつた。みんなぞろぞろ机の方へかへつていつた。それでもあの家のことをかんがへると、えんぴつのうごきがにぶる、やつとかきあげて先生のところへ持つて行きながら窓を見るともう火も煙もなくなつてゐた。

私は自分のことのやうにほつとした。遊び時間は火事の話でいつぱいだつた。

（三豊　上高野校）

弟の死

初六　藤田朋子

私には生きてゐれば、今年六歳になるかはいい弟があつた。この弟は、四歳の時にふとしたことから一夜のうちに、あの恐しい死の世界へ旅だつてしまつたのだ。

その夜、父は特別おそく往診からお歸へりになつた。いつもなら、途中で電話もかけるのに、その夜にかぎつてどうした事か電話もかけず、夜ようやくお歸へりになつたのが、十一時に近かつた。弟は、四十度からの熱で、今にもあやふげなじようたいであつた。父は驚いてすぐ診察してから、「しまつた、もう手をくれだ。」と云ふ悲しい聲をもらした。私は、はつとした。胸の中は早鐘を打つ。しかし祖母も母も、「もう一度、もとの元氣に取りもどさねば」とおつしやつて、一生懸命にかんびようしておいでる。父も一生懸命であつた。母は、兄や私に、「つかれるといけないから、もう、おやすみなさい。」と靜かにおつしやられた。しかし、兄も私も眠る氣にはなれなかつた。弟は、もううはごとを云ひつづけてゐる。私は、この世の悲しみが一時におしよせたやうに、胸がひし〳〵とうづく。

祖母も母も泣きはらした目で、弟のからだへ手をかけて、さすつたり又氷を取りかへたりしてゐらつしやる。しかし、かうしたかひもなく、弟は、「ぼくの母ちやん〳〵。」と云ひながらも、聲はしだいに小さくなつて行く。人間の死の前もともしびが消える時明るくなるように、それから少しはよくなつて、氷を口の中へ入れて、「つめたいね。」などと、かはいい小さい口を動かして、はなしてゐた。が急に元氣がなくなつて、だまつたまゝ目をつむつてゐる。少しして弟は、「父ちやんどこと。」手を動かしてさがしてゐるやうであつた。父は弟の手をしつかりとにぎつた。

すると、こんどは、「ばあちやんと行つてねんねしようね。」これが弟の最期のことばであつた。ちようど一時五分弟は、死の世界へ消えてしまつたのだつた。私はたまりかねて、その場へ泣きふした。その時の母の氣持は、どんなであつたらう。しばらくして、母は悲しみの中にももう一度私達に「おやすみ。」とおつしやつた。

私は靜かに庭へ出て見た。空は黑く、ところ〴〵

に星が、光も弱く青白く光つてゐた。なにを見ても悲しかつた。夏も終に近くなつたせいか蛙の聲はなく、虫の音がかすかに、さびしげに聞えてゐた。私は、この世に神はないものかと悲しかつた。

（三豊 豊田校）

ユメ

ショー　ミヤウチヤウコ

ワタクシハ　ユメヲミテヰマシタ
五ツノトキ　センサウニユカレタ　オトウチヤンノ
ユメデシタ　アライウミノムカフカラ　フネガ　ハ
イツテキマス　オカアチヤント　コンド　ハジメテ
アフイモウトノミツコノ三ニンデムカヘニイツテヰ
マシタ
ワタクシハ　ドンナカホシクオトウチヤングツタ
カハツキリオボヘズ　イツショウケンメイオフネカ
ラ　オリテクルオトウチヤンヲサガシテ　ヰマシタ
ウレシクジツトシテヰラレズアシヲ　バダバダサシ
テメガサメマシタ
メガサメタラニチヤウビノアサデシタ　アヲイ空
ガオマドノソトニミエテヰマシタ（仲多度 琴平校）

赤ちやん

初五　島田サクエ

今日學校から歸ると、お父さんがニコ〳〵しながら「いいことを教へ上げよう。」と、おつしやつてなかなか言つて下さいません。私は、いらだたしくなつて「早く聞かして下さい。」といふと、姉さんに大きな男の赤ちやんが生れたといつて教へて下さいました。私は、御飯もいただかないで一さんに姉さんの内へ急ぎました。行く道に、一たいどんな赤ちやんが生れてゐるのであらうか、姉さんに、よくにて居てゐるのかしら、それとも兄さんによくにた男の子だらうかと考へながら走つて行つたら!!ちやうどさんばさんがおい出て、たらいにお湯を一杯入れて

洗つてゐられる所でした。

よく〳〵見ると、男の子ではなく女の赤ちやんでした。かわいい、かわいい赤ちやんでした。？　お父さんにかつがれたと思つて一人ふき出しました。

赤ちやんのからだには白い粉のやうなものがついて居ます。

ひたいと頭の上までが顔の長さと、同じくらいでへんなかつかうでした。おへそは大へん長く、目はつむつて居ました。そして何か、さがすやうに口を動かして居ます。

物にさわるとちゆう〳〵と、すつて、ねます。とてもかわいいお口で……それを取りのけると、こんどは手をすいます。もみじのやうな小さいお手々を。

おばあさんは、「おや腹七十日腹がへらんというがウソじやのう、はらがへつたんやろ。」と、いつたのでみんなふき出しました。

赤ちやんは「そうだ。」と、いふやうに、ガーゼを

香川兒童文化會賞制定

一年間を通じて『こどもの國』へ發表された皆さんの作品を先生方に選んでいただいて、その年度の文化賞受賞者を決定いたします。表賞の人員、方法等については目下いろ〳〵相談中ですから、次號にはくはしく發表出來ると思ひます。

こどもの聲
先生の聲
父兄の聲

次號より此のページを新しく設けます、規定をよく讀んで下さい

規

一、『こどもの國』への希望、感想等
二、用紙は葉書
三、毎月二十日迄

又すい始めました。!!

あきたのか「アアア……。」と、泣き出すと、耕作が、早くおちちを飲ましなさい。と、兄さんぶつていつたので、又笑ひました。

赤ちやんは百日ぐらいすると、おんぶが出來るとのことです。私は、早く百日が來て、おんぶが出來る日を指折り數へて待つてゐます。

或る出來事

初六　田中智鶴子

針の手を止めて遠く外へ目を休めてゐた母は、とつぜん「あつ。」と叫んだまゝ、氣でもくるつたやうに、はだしで表へ飛び出した。

私も、續いて走つた……「あつ」弟は馬上から、まつさかさまに、道路へ落とされてゐるではないか——。

母は、ころがるやうにそばへ走つて行つた。近所の人も、わいわい集つて來た。

だが弟は、齒をくひしはり顏は血の氣がなく、青ざめ死人そのまゝの姿であつた。

母は、きちがひのやうに「文章々々」と、弟の名を呼んだ。近所の人も「文ちやん〳〵。」と口々に、力一ぱいの聲で叫ぶのであつた。

しかし弟には、聞えないのか、前の通り、身動きもしない。

ついさつき、弟がをぢさんの馬を、かりて一人得意さうに乘つてゐたのは見たが、わづか二、三分の中に、こんな悲しい出來事が、起らうとは——。

母は、はつと私に氣がついたらしく「チィーチヤン早くお父さんを……。」母の言葉も最後までは聞かず、私はむが夢中で父のゐる海岸寺へと走つた。後の方で、まだ叫ぶ「文ちやん、しつかりしろ〳〵。」といふ聲を、地ごくの聲とも聞きながら——。

どこをどう走つたか、自分にも氣がつかなかつたただ「弟が死にませんやうに——。」と神に祈りつゝ

走つた、走つた。

「あゝ弟が死んだ。」ついさつきまで、あんなにして、けんくわしたりして、かはいさうに——、あんなにしからねばよかつた。

「弟よゆるしてくれ。」

そうして「もう一度、息を吹きかへしてくれ。」

「今度から、よくなつたら、きつと〳〵大事にして上るから。もう一度、その目をあけてくれ——。」

私は泣きながら一生けんめい走つた。

歸つてみると、弟は近所の人に、頭から水を浴せられ、家へかつぎこまれてゐた。

それから何時間たつただらうか。いや二、三十分であつた。

今まで死んだやうに動かなかつた弟は、パチリと目を開き、あたりをふしぎさうに見まはし始めた。

その時の母のうれしさうな顏。大きな聲を出し「文章……お母さんだよ、わかつて、わかつて——」

弟は、なほもふしぎさうにしてゐたが、かぶりを上下にふつた。母の顏は、かがやき始めた。

そして「神様ありがたうございました。〳〵」と神棚の前にひれふしたのであつた。

間もなく醫者が來て注射をした。それから一週間位。すくはれた弟は、そろ〳〵歩けるやうになつた「パカツパカツ」といふ、ひづめの音を聞くだけで母と私は、身もちぎられる思ひがする。

「馬はおそろしい。人間の命をとる。」母はこの時から、こんな言葉を時々口にするやうになつた。

弟、弟、私のかはいゝ弟よ、もう今度からは、こんな事をして、母と、この姉の心をいためて、くれるな——。

（仲多度　白方校）

ありの王さま

初二　稲田　祐

あついあついひるまへ、のきしたを、ありの長いれつがつづいてゐます。どこまで行くのか大きなに

もつをかついで、一生けんめいです。小さな山をこえたり、たにをこえたり、げんきに行きます。ぼくがありのあとからついて行くと、大きな石の下にありが入つて行きます。ここが、ありの家だと思つてほりました。あなのおくから、たくさんのありがあわてて、にもつをもつてにげだします。ぼくはどこまでもほりました。すると、大きな虫がでて來ました。をぢさんが「これはありの王さまだ。」と、おつしやいました。あたまは小さくて、からだは大きくて、しつぽに、はさみがついてゐる。手をもつて行くと、木は音も出ずにおれました。それをおとしたかと思ふと、小さなありがとつてまたにげます。ざうりでふむと足二本であばれます。たすかつたありもあります。たすかつたありは、みんなとこかへかくれました。

（仲多度 龍川校）

隣の犬

初五 山下 登

隣の家に大きな犬を飼つた。名をエスといつた。

隣へ來た二三日は元の家へ歸りたがつて、鳴いてばかりゐたが、日がたつにつれて、だんだんなれて來て、垣根をくぐつて僕の家へ來るやうになつた。時々、いりこや御飯をやるので、毎日のやうにやつて來て、まるで僕の家で飼つゐる犬のやうになつた。

僕が使ひに行く時には、尾をふつて、後になり先になりしながら、ついてくるし、おばあさんが琴平へ行く時には、停車場までついて行つて困らせたこともあつたさうだ。

夜になると、何時も、自分の家である隣りは勿論僕の家の周圍までもくる〳〵まはつて番をしてくれてゐた。

僕の弟は、大さうわんぱく者で、エスに隨分亂暴な事をして、エスを困らせるが、平氣で遊び相手になつてゐた。

人間の言葉をよく知つてゐるのか、よく聞きわけ

るので皆に可愛いがられてゐたが、知らない人が來ると、すぐ吠えつくので、他の人達には恐れられてゐた。

かうして樂しく半月程たつたが——或日、僕が山より歸る途中、向ふから友達の池田君（この友達も僕達と同樣大のエスビイキだつた）が、息せききつて走つて來て、

「エス見たいな犬が、警察のそばで死んでゐるのだが——犬はエスかもしれない。僕は今より見に行くところだ。」

僕もあわて〻池田君の後について走つて行つた。けいさつのそばの道ばたに、二三人の人が立つてゐるので、こは〻〳〵のぞいて見ると、そこには、「あゝエスが」……。まぎれもないエスが血をはいてむざんな姿を……。

あまり意外なことなので、僕は、そばの人に聞いて見ると、隣のおばさんがお使ひに行く時、ついて來て、道をよこ切らうした所を、バスにしかれて、苦しまぎれに、鳴きながら走りまはり、かけまはつて、血を吐いて死んでしまつたとのこと。

「あゝ——かはいさうな……。」が、どうすることも出來ない。——。

そばの人達は皆

「よい犬だ。ドイツ種だ。」といつて惜しがつてゐた。僕はたまらなくなつて泣きながら、かけ出したどこをどう走つたのか……。

それより幾日。二度とあの勇ましいなき聲もきかれなかつたし、勿論姿を見かけることも出來ない。

（仲多度 象郷校）

朝がほ

初二 小田村 ランコ

私はおとうさんといつしよに、朝がほのたねをはちにまきました。たねをまいてから毎日夕方になると、ねえさんといつしよに、水をかけてやりました何日かたつとかわいらしいきみどりのめが出て來ま

した。それからだんだんめがのびてあたらしい葉が出たり、ほそい「つる」がのびて行きました。大へんのびたのであとうさんに、たけをたてていただきました。つるがその竹をうれしさうにぐるぐるまはつて、上へ上へとのびて行きました。私は、早く花がさいてほしいので、つづけて水をかけてやりました。何日かたつと小さなつぼみがついてゐましたので「おとうさん朝がほにつぼみがつきましたよ」。と私がいひますと、おとうさんが「そうかね、それでは色のあてやいをしやう」。と、いひましたのでおとうさんや、おかあさんや、ねえさんや私と、四人で朝がほの色のあてやいをしました。おとうさんが青のうす色といひ、おかあさんがもも色といひ、ねえさんは白といひ、私はむらさきといひました。朝がほのつぼみを私は見て、早く花がさいてだれのいつた色があつてゐるかと毎朝毎朝見てゐました。ある日の朝おきて朝がほのところへ一ばんにとんで行きますと、つぼみが二つひらいていろは青のうす色をしてゐました。私は大きなこえで「おとうさん」とよびました。するとおとうさんが大きなこえをだして「どうしたのかね」といつてお家から出て來ました。私は「つぼみが二つさいて色はおとうさんがいつた青のうす色さいてゐますよ」、といひますとおとうさんが「ほーれおとうちやんがいつた色があつていただらう。やつぱり、おとうちやんがよくしつてゐるね」。といつてじまんさうにわらひました。

（仲多度 吉野校）

朝の畠

高二 末包幸子

昨日の朝私の家には大根を蒔きました。今年は雨が少いので大變お水に困つてゐます。私は今朝早く起きて水をかけに行きました。

まだ明けきらぬ川の土手に出ると、やかな朝風がさつとほゝをなでます、もう水のゝはひんやりと冷たい様な氣がします、流れには青草がたゞよひ、さゞ波が小石にさゝやいてゐました。兩手のバケツにしつかりと水を汲んでざぶ〳〵とかけました。あたりの林では小鳥が音樂會をしてゐます。積み重ねてある藁の陰では、こほろぎも鳴いてゐます。

大根畑の軟かな土を素足の裏に快く感じ乍ら、私は川から畠までを何回か運びました。早くまいた大根は黄色な軟らかそうな芽を出して、ちよこんと腰を曲げてうつむいてゐます。これが一日たつと腰がのび二葉が綠色に變ります。

水かけの人はだん〳〵增して多勢になりました。大人の人が「これから二三日は川の市だ」と笑ひながらいつてゐます。半分位かけ終つた頃太陽が東の山から顔を出しました。朝の涼しさも忘れて汗ばむ程一生懸命です。

水をかけ終つた時は、もう太陽は高くのぼり、さゞ波が陽をうけて黄金に輝いてゐました。

（綾歌 加茂校）

◇ ◇ ◇

お人形さん

四年 田中春子

夏休みのしゆくだいに何を作らうかと思つて色々考へてゐました。ふとねえさんの部屋のかわいらしいお人形さんが目につきました。私は急にお人形を作つて見やうと思ひました。お母さんに、白いきれをいただき、頭と手足を作りました。それからをばさんに青いじんけんのきれをもらつてふくをぬひました。お人形に着せるとちやうど、あひました。うれしくなつて、暑さも忘れて、むちゆになつて作りました。次にスカートを作りました。スカートが、ふうわりとふくらんできれいに出來ました。もう帽子だけです。黄色のかたいきれをもらつて、ぬひましたが、どうしても出來ませんのでお母さんに手つだつていただきました。きくの花が咲いてゐるやうな帽子が出來ました。目と口を書いたら、どんなに

きれいになるだろうと思ひました。ねえさんは人形の顔を書くのが上手ですから、今度は、ねえさんにお願ひして、書いてもらひました。ねえさんが「書いたよ」と言つたので見ますと、私は「まあかわいらしいお人形」と、思はず聲が出ました。かみは、ちりちりと、こてをあててゐるやうです。目はぱつちりと丸く、口は小さくて、本たうにかわいらしい私は、うれしくてうれしくて、たまりませんので、お人形さんをだいて、家中を歩きまはりました。その晩、ねどこへ入つてから、ふとお人形さんのことを思ひ出して、行つて見ると、「春子ちやん一しよに寢るの。」と言ふやうなうれしさうな顔をして、靜かにすわつてゐました。私が、そつとだくと、私の胸にすがりつきます。私は「さあ休みませう。」と、かわいいお人形さんと一しよに寢ました。（丸亀城坤校）

思い出

初三　木下富江

今日しみのついた服を見て思ひ出しました。しんせつな近所の人におわかれをしておばあさんとおかあさん、妹二人が自分の物をそれ〴〵ルツクサツクに入れて、元氣よく鎭南浦を出發した時のうれしかつたこと、途中汽車にのせてくれないので夜も晝も休みなく歩きつづけました。食べ物をとるひまもなくてみんなはへと〳〵につかれましたが、妹の手をひつぱつて班長さんにつれられて歩きました。一番苦しかつたのは雨の降る眞暗な夜道に立つて朝の來るのを待つた時でした。妹もねむいらしく道の上にすはるので、お母さんがその度にゆり動かしておこすのに困つていらつしやいました。お母さんの背中の妹もびしよ〳〵にぬれてねむつてゐました。私もねむくて〳〵たまりませんでした。やつと朝になりました。よい天氣だつたのでみんな着てゐる着物を洗つてかはかしてから又歩き出しました。ロシヤ人がゐる所はこわくてお母さんにかくれて歩きました。大きな船に乘せられて內地に着いた時はうれしくて

うれしくてをどり上りました。おそろしい事や苦しかつたことなどがつぎ〳〵と思ひ出されました。（三豐詫間校）

まんしうのおともだち

小川保美

せんそうがをはつてからおとうさんのくわいしやへ中國の人たちがひきつぎに來ました。私の家のおとなりへその人たちがひつこして來ました。王さんの家には私と同じ年の女の子がゐました。はじめはどちらもだまつてゐました。少たつて朝早くだれかまどをたたくのであけて見ると王さんがかかへきれないほどあんづの花を持つてだまつて私にさしだしました。私はなんども「ありがたう。」といつてもらひました。その次の日私は、王さんにクレオンを持つて行つてあげました。二人はだんだんなかよしになりました。王さんは、ありがたう、さやうならと日本ごでじやうづにいふやうになりました。私たちの家へいつわるい兵たいが來るかわからないので、だいぢなおにもつをあづかつてくれました。私は大せつなお人形や、けがはのオーバや、おふとんば持つてかへれないのでみんな王さんにあげました。私たちが引あげてかへる時王さんは、おとうさんといつしよに朝早く私たちをおくつてくれました。そして大きなつつみを私にくれました。汽車にのつてあけて見ると私の大すきな、なんきんまめがたくさん入つてゐました。私はいまごろ王さんは、どうしてゐるかしらといつも思ひ出します。（丸亀城西校）

お迎ひ

初四　三木秀治

十一日の夜十二時過ぎて、弘田の家の戸を、たたく音に、ふと目がさめた、僕は、お父様のかわりにおばあ様の家で泊つてゐたのでした。

今頃誰だらうと思ふと、こわい様な見たい様な氣

持で、じつと息をこらしてゐると、何んとなつかしい、お父様のお顔、飛び上るほど、嬉しかつた。今頃どうしてと思つてゐると、僕を姫路のお母様の家へつれて行つて、下さるとの事、夢かと思つた程でした。

嬉しさでもうねつかれない。いぢわるの弟の顔、お友達の顔など目に浮んで來て、早く行きたくてたまらない。をぢ様や、おばあ様達は久しぶりの、お父様をかこんで、いつまでも、色々とお話をしていらした。お話を聞いてゐると、僕達にはわからないけれど、先生やお友達とキヤツチボールのけいこ、などしてのんきに遊べてしやわせだと思ひました。大阪や京都等、お米どころか、何日も、何にも配給がないとか、僕達田舎の者は喜ばねばと、つくづく思ひました。お母様から、工場の一部が焼たとの、しらせに、お父様もゆつくりできず、僕をつれて姫路へ急ぎました。途中汽車の中の景色や船の中での樂しさ。心は姫路へ〳〵と、やけあとへは、小さいばらつくや、大きな建物が並んで建つてゐます。僕が春に行つた時より、おどろくほどの、ふつこうぶりでした。姫路へやうやく、はいつた時の嬉しさ。つかれもどこかへ飛んで元氣いつぱいお父様と二人てお家へ急ぎました。

（仲多度 多度津校）

編輯をおへて

▲いろんな事情でおくれてゐました創刊號をやつと皆さんのお手もとへ送る事が出來ました

▲世界的童話家である久留島武彦先生の「足跡に咲いた花」は、せんだつて、丸亀高女講堂で、香川兒童文化研究會の創立記念童話會の折先生自ら御口演下さつた大變いいお話です

▲中西先生の草の話、新田先生のシューベルトのお話、前川、田中先生の歌と詩、みな得がたいものばかりです。靜かに何べんも讀んで下さい。そして六ケしいところは、皆さん自身の心の糸にふれるまで、先生や父兄の方にかんしようしてもらつて下さい。

▲根津君の童話もなかなかおもしろいものでした。その他詩も歌もりつぱなものばかりですが、つづり方になると、今少し、いいものがほしいと思はれます、これからは、皆さん自身の雜誌「こどもの國」を通じて一つうんと勉強して、編輯の先生方を、ハツと思はせるやうなものを、どしどし送つて下さい。

▲「こどもの國」が皆さんの本當の靜かな心のお友だちになれるやうに、そして十年二十年ののちに、それそれ思ひ出されるものが「こどもの國」につながつて、新生日本の、あかるい郷土人になれるやうに、先生方も一生けんめいですから皆さんもよく勉強して下さい

▲お願ひ　兒童文化研究會の會員であられる先生方はもちろん、一般父兄の方達にも、郷土兒童の文化萌芽の育成、昂揚に心を寄せられる有志、進んで參考機關、書物、設備、資料等の紹介御協力お願ひいたします。

▲石森先生から、ほのぼのとした追想記「サヌキの思い出」をいただけたことは、ひとつの誇りです。號を追つて書きつづけて下さることになつて居ります。

いろいろな計劃

『こどもの國』の

一、**紙芝居**　皆さんの作品や、先生方のいろんなお話を脚色して紙芝居を作り『こどもの國』のおぢさん達が皆さんの學校へ巡廻してまいります。

二、**巡廻展覽會**　繪、工作品、寫眞、標本などのいいのを集めて學校を巡り展覽して皆さんに觀ていただきます。

三、**こどもの國合唱團**　皆さんのお作りになつた詩や童謠の中でいいものは、その方面の先生にお願ひして作曲していただきます、合唱團でおけいこして放送したり、學校へ廻はつて行きます。

四、そのほか
こどもの國お話會　こどもの國俳句會
こどもの國繪の會　こどもの國映寫會

五、**こどもの國文集の發行**　いい作品をえらんで文集、詩集、お話集等を出して、皆さんに、讀んでいただきます。

理化學器械材料
丸亀市　平尾商店　上地方

琴平參宮電鐵

丸亀市上地方
フタバ文具店
吉本商店

觀音寺町驛通
のぼりや
文具店

觀音寺町
三豐女學校前
にをや文具店

國定教科書
學校用品
物部書店
觀音寺町柳町

四國製藥株式會社